



全国棚田(千枚田)連絡協議会

# 棚田ライターズ

第29号 2003.3.31 (季刊・年4回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

〒169-0073 東京都新宿区百人町1-23-29-202

TEL 03-5389-9937/FAX 03-5389-0078

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



長野県更埴市、おはすて棚田で、京王観光労働組合「棚田人」サークルのみなさん

棚田が自動車を走らせる

時事通信社解説委員・棚田学会理事

野村一正

戦争もいとわないほど人類にとって重要、かつ不可欠な石油、石炭、天然ガスなどの化石燃料。ところが最近、これら化石燃料の評価が幾分か悪化している。代わって脚光を浴び始めたのが、風力や太陽光、水力、バイオマスなどの「再生可能エネルギー」。「自然エネルギー」などとも呼ばれ、いまやもてもてである。

両者の立場を逆転させた最大の原因は、地球温暖化。化石燃料は温室効果ガスを排出するというので、すっかり悪役のイメージが定着した。これに対し再生可能エネルギーは、コストパフォーマンスは悪いが二酸化炭素を排出しない。

原子力を除けば、人類が利用しているエネルギーは、太陽からの恵みである。化石燃料も、はるか古代の生物が閉じこめられてできたもの。もとをただせば太陽エネルギーによって作られたもの。ただ何百万年、何千万年という長い時間をかけて作られたものを、わずか三百年程度の間に使い尽くしてしまおうとしている。その結果が地球温暖化という重大な環境問題を引き起こした。

できるだけ再生可能エネルギーを利用できるようにしようということは、できるだけ太陽の恵みの範囲で生活しようということに他ならない。空気や水の流れ、生物体、そして太陽光・熱を、可能な限り利用しようということだ。人類が昔からやってきたことに新しい技術や知識を加味して、もっとうまく利用しようということなのである。

石油や石炭をふんだんに使う生活は、二百年ほど前からはじまった。人類の長い歴史から見れば、ほんの一瞬の出来事だ。だがこれから先は、エネルギー使用を太陽の恵みの範囲内に収める努力をしなければならない。エネルギーの分野でも、自然との共生を考えなければならなくなつた。棚田にも、バイオマスエネルギー生産という新しい役割が加わることになる。棚田が自動車を走らせる、そんな時代がもうそこまでできている。

特集

わ  
た  
し  
た  
ち  
の

都市住民サイドの棚田とのかかわりが少しづつ深まってきた。高知県梼原町では、1992年にはじめた棚田オーナー制度のなかから2組目の集落定住者が誕生した。早期退職をし、完全定住で梼原での棚田ライフをはじめるという。全国でも自分の暮らし方につながったそれぞれの「棚田的ライフスタイル」が生まれている。そんな棚田的ライフスタイルを紹介しよう。

## 農村の景観を守らなければ。その一心で土地を入手

『恵那ファーム オーナー』

飯田容子（愛知県名古屋市在住・ホテル経営）

1996年、岐阜県恵那市坂折地区に近い山林、田畠、民家併せて5000坪と

いう広大な土地の話が舞い込んできました。私は、その5年ほど前から農業にかかるわってみようとして農地を探していました。

うまく言葉にできませんが、ずいぶん前から自然環境を守るということが、私の人生のテーマのようなものになっています。子どもものとき、植物の光合成を知り、「緑がない人は生きていけないんだ」と思っていたところに、TVでアフリカの原生林伐採の映像を見てしまい、「環境を破壊しちゃいけない」と強く心に残つてしまつて…。

だから、北海道知床のナショナル・トラスト運動にも参加してきました。でも、もつと自分が積極的にかかわって、守つていかなければ、って思っていた。

の自然環境を守ろうという行動につながつていったのです。

ただ恵那市の5000坪の農地というのは、あまりにも広すぎて、断りに出かけました。そこは、築300年という民家で、80歳を過ぎた老夫婦が、後継者がなく、手放さざるをえなくなつたお宅でした。訪れたとき、山林に畠、古い民家の前に棚田、そこをつなぐ小道。

それは、私の心の原風景そのものでした。心の原風景に出会つてしまい、この土地、この景観をそのまま残したいと思つてしまつたんです。

ありがとうございます。友人や知り合いが多かつたので、名古屋市内で「いつしょに田畠をやりませんか」と若い人の多い会社やレストランのオーナーなどに、広く声をかけたんです。次の世代にこの景観を残したい、ということがテーマでしたから、発信先は若い人になりました。

そこで、この場を「恵那ファーム」と名づけ、月1回、おいしいものを食べようという楽しみとセットで、農作業や民家の修復に取り組んできました。多いときは100人。でも、ボランティアさんは100人。でも、ボランティアさんつていうのは、案外と当てにならないの。

自分ででもやるぞという覚悟とともに、やめるのはいつだってできる、せめてこの景観だけでも守りたいという義務にもいいかわからない。お金を出せば、農協さんが米づくりをする人を世話して下さることで、ホツとしたのですが、でも、それはフェアじゃない。自分の力でここまでこの景観を守れるかやってみよ



# 棚田的ライフスタイル

一方で、日本の食糧自給率の低さ等に疑問を感じており、それが、自然環境を守らねばという思いとリンクして、農地

うと思つたんです。

多かつたので、名古屋市内で「いつしょに田畠をやりませんか」と若い人の多い会社やレストランのオーナーなどに、広く声をかけたんです。次の世代にこの景観を残したい、ということがテーマでしたから、発信先は若い人になりました。

そこで、この場を「恵那ファーム」と名づけ、月1回、おいしいものを食べようという楽しみとセットで、農作業や民家の修復に取り組んできました。多いときは100人。でも、ボランティアさんは100人。でも、ボランティアさんつていうのは、案外と当てにならないの。

自分ででもやるぞという覚悟とともに、やめるのはいつだってできる、せめてこの景観だけでも守りたいという義務にもいいかわからない。お金を出せば、農協さんが米づくりをする人を世話して下さることで、ホツとしたのですが、でも、それはフェアじゃない。自分の力でここまでこの景観を守れるかやってみよ

うと思つたんです。

山林の落ち葉を使つて土づくりに挑戦したり、とても恵那を気に入つて、がんばつてくれている。体験学習は、彼らがボランティア出身ということもあって、最高のものができていると思います。

今後、不耕起農法に着手したい。イトミミズやタニシが発生し、メダカがたくさん泳ぎ、鳥たちが集まり、田んぼが自然の交響曲になるというのです。もう、やらずにはいられないですね。人と生きるものや自然が共生する、それこそが、私が守りたい原風景なのですから、ね。（談）

# 労組でサークル「棚田人」を結成

TANADiAns

京王観光労働組合 中央執行副委員長

花川和彦

私たち労働組合の仲間を中心に、社会貢献の一貫として「棚田保全」を目的にし、「棚田人（TANADiAns）」というサークルを作つて活動しています。「何で労働組合が棚田を？」という疑問は、当該の組合員のみならず、多くの方が感じられるのではないか。

かつて組合と言えば春闘によるベースアップ・年収改善が活動の中心でした。しかし、景気の停滞や価値観（生き方・働き方）の多様化などにより、これまでのようなやり方だけでは対応しきれない問題が多くなってきました。併せて「組合員の組合離れ」が進行しており、各組合にとつて運動方針の転換が迫られています。たため、私たちの組合も数年にわたり議論を重ね、既存の活動にとらわれない新たな方針を策定しました。

ちょうどその頃、劇団ふるさとやらばんとのお付き合いが始まり、棚田の現状や役割などを認識するようになつたことから、策定した方針にある「組合の社会貢献」という項目の中に「棚田保全の取り組み」が織り込まれたのです。そうして誕生したのが「棚田人」です。現在は「先ずできることから」ということで、2000年より長野県更埴市の「おばすて棚田」の一区画をお借りして、田植え、草刈り、稲刈り・はぜかけ、脱穀・精米と実地体験をしています。自分たちの流した汗の成果としておいしいお米が

食べられることだけでなく、素晴らしい景色とさわやかな風を体感し、都会で見ることのできなくなつた生き物たちと接することによって、他では得られないような素晴らしい体験をさせていただきました。

メンバー個々においても、忙しい仕事の合間に参加して、仕事によるストレスとのバランスを取つていてる者、作業後のお風呂と馬刺しを食べながら一杯を楽しみにしている者、子供との対話の手段の一つにしている者、現地で所帯を持つことを希望（？）している者など目

まだまだ“楽しんでいる”といったレベルのため、「棚田保全」という所期の目的には程遠い状態ではありますが、これからも活動を継続していくたいと考えています。

ちょうどその頃、棚田の横で秘密基地を作つた。今では、棚田の横で秘密基地を作つたり、カエルやオケラを捜したり、ムカデやヒルと出会つてしまつたり、木に登つたり、みかん畑で、かくれんぼをしたり、私も仲間入りしたい程、遊びに熱中して

稻淵地区の棚田は、米だけではなく二人の子供を育ててくれています。大切な大切なものが、自分の近くにあるという簡単なことに、気づきました。

私達にとって飛鳥は、自然を楽しむ生活がおもしろいと教えてくれたところです。

摘み菜でよもぎだんご、ノビルやレンゲ、アザミの天ぷら、ゲンノショウコ、オオバコ、セリ、クズ、コゴミ、タケノコも頂き、季節が変わっていくのを、野草で食べながら知るおもしろさ。

飛鳥川で、岩のすべり台を夏でも冷たいと震えながら

奈良県明日香村で棚田オーナー制をおこした役場は、内良觀さんは、「DASH村」をやりはじめた。「懐かしい美しさとの出会い大切にしたい」と話す



# 自然を楽しむ生活はおもしろい

奈良県明日香村棚田オーナー

野村智津子（主婦・奈良県生駒市在住）

長男、倫太郎が産まれ2ヶ月。初めて裸足で入つて、まるで胎内に居るような気持ちいい心地良さを味わつた。天気もよく、水ゆるむ季節が足の裏から体中に染みわたり、忘れられない米作りのスタートでした。

今では、棚田の横で秘密基地を作つたり、カエルやオケラを捜したり、ムカデやヒルと出会つてしまつたり、木に登つたり、みかん畑で、かくれんぼをしたり、私も仲間入りしたい程、遊びに熱中して

稻淵地区の棚田は、米だけではなく二人の子供を育ててくれています。大切な大切なものが、自分の近くにあるという簡単なことに、気づきました。

私達にとって飛鳥は、自然を楽しむ生活がおもしろいと教えてくれたところです。摘み菜でよもぎだんご、ノビルやレンゲ、アザミの天ぷら、ゲンノショウコ、オオバコ、セリ、クズ、コゴミ、タケノコも頂き、季節が変わっていくのを、野草で食べながら知るおもしろさ。

飛鳥川で、岩のすべり台を夏でも冷たいと震えながら

すべり、収穫の時いつの間にか、栗の実が落ち、時がゆっくりと私達を季節の中連れて行つてくれるのは、棚田に通い続けるからわかることです。

飛鳥と同じ奈良県の生駒というところに、住んでいます。地下鉄の駅があるのでも、ビジネスライフでは、とても便利なところです。でも、山、川、棚田が隣り合わせにある飛鳥とは、歩くスピードが違つてくるのです。棚田のように、空にまで広がつて行く空間は、人の心を広げていってくれる。棚田に吹く風は、眼に見える不思議な音も吹く。棚田のライフスタイルって、棚田で知った心地良い時間を、自分の毎日の生活の中に見つけ出すことかな？

山に登ること、川に行くこと、空を見ることも、だんだんと多くなり、旬の野菜を大事に食べ、玄米のおいしさを、もちろん近づいたところに、生活の基を置いています。

二人の子供達にとって、稻淵はきっと、ふる里になり、これからも大事な事を決める時に心の奥の声となつて行くような気がします。

稻淵の農家の人は一生懸命の働く姿は一生懸命。とても静かな落ち着いた一生懸命があるんだと、野村家に教えてくれているようです。いつも感謝しています。ありがとうございます。

# 棚田と人と私

島根県柿木村立柿木小学校6年担任教諭

## 三井久美子

島根県柿木村棚田トラスト会員

## 佐竹信夫

(広島県広島市在住)

小学校教員として柿木村に来て、5年目を迎えた今年。6年生担任になつたことで自動的に(?)棚田オーナーになつた。

私の勤務する一村一校の小学校では、4年前から村の特産品をテーマに「ふるさと学習」を行つてゐる。6年生のテーマは「棚田」。「棚田オーナー制度」へ参加することで学習を進めていく。私は「仕事」として、棚田に関わることになった。ところが、その「仕事」が次第に「喜び」や「楽しみ」へと変わつていった。この大変化をもたらしてくれたのは棚田に関わる「人」である。

村役場産業課の棚田担当であるT氏。

棚田のことなら何時間でも語れる、棚田のスペシャリストである。彼は幅広い情報と人のネットワークを持ち、子どもたちの学習に関してもいつも多大な協力を寄せてくれた。棚田情報を限らず、見聞の広い彼からは多くの刺激を受けた。アジアの国々の旅行話、冒険談。昨夏には彼の友人という「NGO」の方を紹介してもらい、世界情勢の裏話まで聞かせてもらつた。自分から積極的に周囲に働きかけ、世界を広げながら生きることがどれだけ人を輝かせるか。T氏の生き方から、私が学んだことである。

そして、学校の田んぼの受入農家である田村さん一家。親子2世代の夫婦4人で、いつも私たちに農作業を教えてくだ

さつた。温かく明るかな人柄、子どもたちに自分が受け継いできた先人の知恵や技を懸命に伝えようとされる姿が印象的だつた。棚田での米作りはもちろん、畑作、肉牛の飼育、炭焼き、養蜂までされ

ている。

「大変だが、じいさんがやつとるから、やらんわけにはいかんのんじや。」笑顔で話される田村さん。昔から受け継いできた大井谷の生活の知恵を、今も大切に守つておられる。何でもお金で手に入れる私の生活はない、本当の「豊かさ」を感じた。

T氏、田村さん一家の他にも、棚田をきつかけに知り合つた人はまだまだ大勢いる。遠方から来るオーナー、地元大井谷地区の人々、地域を支える各機関の方々など……。棚田に関わる人は皆、温かい笑顔と未来へ向けるエネルギーに満ちている。私は皆さんからたくさん、「喜び」や「楽しみ」をいただいた。「人」と関わり合うことが好きになり、その「人」を育む柿木村のことも以前に増して好きになつた。

T氏の言葉「棚田から柿木村のよさが見えてくる。」まさにこの通りだつた。

もう一つ、私自身の変化がある。それは、自分の本来の故郷への思い、である。私は自分の故郷を、家族さえも今まで蔑ろにしてきた。そのよさを知らないのでなく、見ようともしなかつた。棚田の

私は、最初柿木村が島根県のどの位置にあるのかも知らなかつた。

柿木村のことを初めて知つたのは、平成12年2月14日付の中国新聞の記事である。その記事は見出しに「棚田保存ヘトラスト制」と出ていた。記事では棚田オーナ制を始めたが、さらにトラストの導入で、資金面でも保全の取り組みを応援してもらうのが狙い、とあり、続けて柿木村の大井谷地区の現況や、トラスト制の仕組みが書かれていた。

農作業や米作りに関心は持つていたが、生まれてこのかた農作業の経験が皆無の私は、自力で米を作れるはずはないのでトラスト制への参加は渡りに舟だつた。

それに「かきのきむら」の語感が好ましくかけに知り合つた人はまだまだ大勢いる。遠方から来るオーナー、地元大井谷地区の人々、地域を支える各機関の方々など……。棚田に関わる人は皆、温かい笑顔と未来へ向けるエネルギーに満ちている。私は皆さんからたくさん、「喜び」や「楽しみ」をいただいた。「人」と関わる人が好きになり、その「人」を育む柿木村のことも以前に増して好きになつた。

作業で田村のおばあさんに会い、その笑顔にふれる度、故郷にいる祖母の顔が浮かんだ。大井谷の人々が棚田を、柿木村を愛するように、私にとつても一番大切な、愛すべき故郷がある。そのことを、棚田に生きる人々の姿を通じて、思い起

こすことができた。

先日、来年度の「棚田オーナー募集」に応募した。夫と二人でオーナーになろうと思つて立つた。(実は夫との出会いも柿木村だった)私の転勤が決まり、柿木村を去ることになつたが、これからもこの

しくひびいた。きっときれいな川があつて、山の緑がきれいな静かなところだろう。そうに違いないと勝手に心に村の風景を浮かべたりした。

トラスト会員になるとすぐに棚田に関するいろいろなパンフレットや柿木村の広報を送つてくるようになつた。パンフレットや資料は熱心に読んでファイルして保存してある。しかし、柿木村へは平成12年の入会以来1回しか行つていないのが反省点である。

行ったのは、秋の稲刈りの時だつた。展望台の小高い丘から棚田の全景が見渡せる。オーナーが沢山来つていて、それぞれの田に入つて稲刈りをしていた。それを見ているとまるで大井谷の棚田が活気に満ちて喜んでいるように見えた。見ている私も自分の田の稲刈りをしているようなうれしさがあつた。

春になつたら柿木村内で1泊して大井谷のまわりをゆっくり散歩したいと思う。やはり田植えの時期が一番きれいだらうと思う。

ひとつ残念なことはトラスト参加者が少ないことである。友人にすすめようと思つても、年間1万円のお金がかかるとなのでやはり遠慮してしまう。なんとか村のご努力でトラスト会員の拡大をお願いしたい。

そうしてトラスト交流会などを催してくれたら楽しいし、有意義だと思う。

# トラスト会員になつて棚田を知る

島根県柿木村棚田トラスト会員

## 佐竹信夫

(広島県広島市在住)

# 米屋の視点から棚田で汗をかく

杉並主要食糧小売商組合組合長 中島 哲

あきら  
(東京都在住・全国棚田(千枚田)連絡協議会正会員)

東京杉並区で米屋をしています。現在、千葉県大山千枚田保存会大豆トラスト会員です。昨年は種まき、草取りに参加しました。地元の方は、猪や兔の被害を心配しておりましたが、無事収穫でき、8キロの大豆を入手できました。全コースで半年ほどかかります。

農作業の前日土曜日には、交流会があり、参加者全員で自炊をするわけですが、たちまち気心が知れるわけです。同じ釜の飯を食べた仲と申しますが、たった1日でも効果はあるものです。学生や夫婦での参加も多く、話題はつきません。もちろん地元保存会の人々のおかげで、お客様待遇に甘えております。

教師は教育の立場から、米屋は米屋の視点から、棚田で汗をかけば学ぶものがあるのです。体験は、積めば積むほど知恵になります。だから毎年行きたくなるのです。何も知らない自分、失敗ばかりの自分に出会えるなんて、すばらしいと思います。

そして最終判断を下すのが、お天道様と野生の動物達で、たったの1日で全てが無に帰することもあります。

石川県輪島市白米地区の棚田が最初の出会いでした。平野部の田圃しか知りませんでしたから、海岸からせり上がった棚田にはびっくりしました。「この米を販売したい」とすぐ思いました。日裏幸作さんを市役所の方に紹介していただき、

# 労組の考える「棚田的ライフスタイル」

電機連合総合研究センター副所長

片岡武夫

お願いしたわけですが、「あそこは観光のためだから」とのことでの断念しました。

その後、新聞紙上で、全国棚田(千枚田)連絡協議会結成を知り、入会したわけです。

全国各地の同業者もいるのではと思つていましたが、初期の頃はあまり見かけませんでした。今は、棚田の米は棚田農家や保存会におまかせすればよいと思つています。

私の店には、全国各地の棚田の写真がパネルになって掲示されています。ふと話題がはずんで棚田に行つた人、保存会に入会した人、棚田の前で歩みを止めるのでしょうか。

人がいるんです。話題がはずんで棚田に行つた人、保存会に入会した人、棚田の前で歩みを止めるのでしょうか。

私は、農を取る環境は大変厳しいものがあります。WTOにおける関税引き下げ交渉、食の安全に関する問題、後継者難……いずれも大変厳しい試練です。しかし、私たちには食べなければならない生きていけません。携帯電話がなくて死ぬ人はいませんが(と思ひますが)、

食べなければ確実に死にます。その、食を支える根幹の食材は農を通じてしか得ることが出来ません。

また、食べるということは味覚を通じて「美味しい」という大変しあわせな気分も提供してくれるのです。美味しいものを作つて美味しい時に吃する、これこそが至福の喜びといつても過言ではありません。

農と同じく、私たちの働きも大変です。仲間を取り巻く環境も大

電機産業に働く労働者の集まりである私共電機連合は、今年の6月に結成50周年を迎えますが、その記念事業のひとつとして、「食の安全と農とのかかわりを考え」という運動を推進中です。労働組合と農、なにかピンとこないこの両者ですが、しっかりとつながっています。

ご承知のように、農を取り巻く環境は大変厳しいものがあります。WTOにおける関税引き下げ交渉、食の安全に関する問題、後継者難……いずれも大変厳しい試練です。しかし、私たちには食べなければならない生きていけません。携帯電話がなくて死ぬ人はいませんが(と思ひますが)、

食べなければ確実に死にます。昔から私たちの身近に存在しています。昔から私たちの身近に存在していました里山と棚田、治山治水の根幹をなすこの両者の存続に危機が訪れていました。

日本の美しい国土を保全していく責任は私たち誰もが負う義務であり、その意味でも農を通じて里山・棚田とふれあい、守る努力をしなくてはなりません。

労働組合は、組合員とのふれあいを通じて広く社会における課題を考え、より良い社会作りに貢献する社会的責任があると私共は考えています。その意味でも、今回の事業は大変価値のある運動だと思ひます。今年の5月下旬、縁あって大山千枚田にお世話をになり「電機連合田園」実体験を組合員とともに行ないますが、行きずりの嵐ではなく、根をおろした運動として継続していきたいので宜しくお願いします。



東京・阿佐ヶ谷にある中島さんのお店「大提燈米穀店」の店前には、棚田の写真が飾ってある。そのパネルをもって店のなかで。まん中が中島さん

# 鳥取県智頭町 新田地区

取材・文: 石井里津子

## 集落でNPO法人に



手前が「清流の里新田」、その向こうが「新田人形淨瑠璃の館」

### 施設運営やカルチャーラーニング

喫茶店「清流の里新田」は、そこに行けばだれかがいる。お

年よりも足を運ぶ。また、小銭をポケットに入れて、農作業に出かけるようになった。帰り

に一杯、のどを潤す楽しみができた。ここは、集落の女性4人がローテーションを組み、冬期

間以外営業している。月1回開催する漬物市も大好評だ。

そして、併設された人形淨瑠璃の舞台広間で、淨瑠璃の上演。3年前からは女性も人形の遣い手となり、公演依頼もこなす。

さらに「清流の里新田」で月1回、テーマを変え、独自に主催する「新田カルチャーラーニング」が人気を博している。3年前からはじまり、公演依頼もこなす。

さらに「清流の里新田」で月1回、テーマを変え、独自に主催する「新田カルチャーラーニング」が人気を博している。3年前からはじまり、公演依頼もこなす。

まつたこの講座は、この3月で35回目。なかには弁護士の中坊公平氏や高校1年生で2足歩行ロボットを作成した青木香織さん、そして弁護士、大平光代さんのときには300人以上が集まつた。

それ以来、NPO取得は「自分たちは、ここで生きていくんだ」という一つの覚悟の表明のよう

に思えた。この地の環境や伝統文化を生かし、自分たちに暮らしが安定や人生の満足を与えてくれる、これらの事業を今後も継続していくという覚悟である。

代表の早瀬勲さんはいう。

「将来的には、託老所など福祉ビジネスを考えています。自分たちは老後もあります。若者は地域の外で働いてもらつたとしても、定年退職後は、ここに帰つてきなくなる場所にしたいんです。定年後の人生を豊かに暮らせる場所。それが新田です」。

また、農業体験事業の一つ「田んぼの学校」でも、テーマを掲げ、独自の体験事業を行なう。昨年は「自立心を育てる」というテーマを

設け、参加した子どもたちが、畑に出向き野菜を採り、自分たちで食事をつくるなど、ユニークな体験を生み出している。

さらに、「清流の里新田」の近くなっている。今後、自分がローテーションを組み、冬期間に以外営業している。月1回開催する漬物市も大好評だ。

そして、併設された人形淨瑠璃の舞台広間で、淨瑠璃の上演。3年前からは女性も人形の遣い手となり、公演依頼もこなす。

さらに「清流の里新田」で月1回、テーマを変え、独自に主催する「新田カルチャーラーニング」が人気を博している。3年前からはじまり、公演依頼もこなす。

まつたこの講座は、この3月で35回目。なかには弁護士の中坊公平氏や高校1年生で2足歩行ロボットを作成した青木香織さん、そして弁護士、大平光代さんのときには300人以上が集まつた。

それ以来、NPO取得は「自分たちは、ここで生きていくんだ」という一つの覚悟の表明のよう

に思えた。この地の環境や伝統文化を生かし、自分たちに暮らしが安定や人生の満足を与えてくれる、これらの事業を今後も継続していくという覚悟である。

代表の早瀬勲さんはいう。

「将来的には、託老所など福祉ビジネスを考えています。自分たちは老後もあります。若者は地域の外で働いてもらつたとしても、定年退職後は、ここに帰つてきなくなる場所にしたいんです。定年後の人生を豊かに暮らせる場所。それが新田です」。

100人を超える人の食事の世話も、過不足なくやり遂げる。軽快に客対応をこなす2人は、10歳以上若く見えた。

\* \* \* \* \*

新田地区は、NPO法人化の目的として、第一に「小さな自治体」をつくりたい」としている。

過疎・高齢化が進むなか、行政がロッジとして使用され、あと

の2軒は、Iターンの家族とUターンの家族に、10haの農地とともに貸し出されている。これ

も町が建設し、集落で運営している。定住者を増やすため、あ

と5軒は建てたいという。

また、体験交流事業を継続していく際に、NPOという社会的信用をもつことは、大きな強みといえる。もちろん、行政等からの支援も受けやすく、将来的には、寄付金を集めることも視野に入れている。

それ以上に、NPO取得は「自分たちは、ここで生きていくんだ」という一つの覚悟の表明のよう

に思えた。この地の環境や伝統文化を生かし、自分たちに暮らしが安定や人生の満足を与えてくれる、これらの事業を今後も継続していくという覚悟である。

代表の早瀬勲さんはいう。

「将来的には、託老所など福祉ビジネスを考えています。自分たちは老後もあります。若者は地域の外で働いてもらつたとしても、定年退職後は、ここに帰つてきなくなる場所にしたいんです。定年後の人生を豊かに暮らせる場所。それが新田です」。



## 事務局 ニュース

事務局、石川県輪島市からのお知らせコーナーです。

虫が這い出し、西の方からは桜のたよりも聞こえる季節となりました。会員の皆様におかれましてはいかがお過ごででしょうか。

さて、2月14日に東京で理事会が開催され、千葉県鴨川市でのサミットの報告、今年9月5日～6日、坂折棚田で有名な岐阜県恵那市で開催のサミット概要の紹介、愛知県鳳来町からのサミット開催地採択請願書の取扱、今後の体制等について協議を行いました。

鳳来町の請願書については全員一致で採択、恵那市のサミットについては、今後細部を詰めて日々近くなつたら会員に案内する予定とのことであり、楽しみにしたいと思います。

なお、鴨川サミットの報告書が届かないんだが、という問い合わせが何件かありました。このライフルスが出る頃には完成し鴨川市より発送の運びとなつております。遅れたことお許し下さい。

話変わりまして、「ライフルス第27号」でご紹介しましたが、「富山県立中央農業高校」に「棚田を守り隊」という高校生ボランティアグループがあります。棚田の持つ多面的機能や環境保全に棚田が

関わっていることを知った生徒が、平成13年から棚田の草刈りを始めたのです。また当市のことになりますが、「白米の千枚田」でも、「愛知県立安城東高校」が修学旅行の中で昭和57年から平成3年までの10年間毎年草刈りを行つてくれました。

横浜ベイスターズに平成9年11月のドラフトで1位指名された谷口投手の母校「石川県立町野高校」は、10年前から毎年稻刈りに来てくれています。生徒らの頑張りに感謝するとともに、未来を担う子どもたちに棚田の素晴らしい大切さを教えていくのもわれわれの務めかなとも思つてあります。

輪島市が事務局を引き受けて早1年になります。会員の皆様には常にご協力を賜り感謝しております。輪島市百選にも選ばれている棚田、坂折地区の棚田19haでの経験に基づいています。坂折地区は、平成6(1994)年から農地整備構想を検討し、平成9年に事業実施の方針を決定しながらも、整備と保全のはざまで揺れた地域である。市では、平成9年度から10年度にかけての歴史・民俗調査等も行つた。そして、平成11(1999)年には、早稲田大学教授・中島峰広氏を中心に地元農家も入つた「恵那市坂折地区の棚田に関する整備・保全構想検討」が決まりました。「整備・保全のためには、口だけではなく手も足も出してください。理想と現実には隔たりがあり、棚田を思う一人一人がムリせず出来るところから協力することによって、危機を迎える棚田も蘇り育つていくのではないかでしょうか。ぜひお近くの棚田に足を運んでいただき実際耕作している人の話を聞いていただけたらと思います。

事務局が4月から「千葉県鴨川市(農林水産課)」へ電話0470-93-7834に変わります。今後ともよろしくお願い致します。

2003年9月5日(金)～6日(土)  
岐阜県恵那市にて開催!  
テーマ 棚田とともに生きるふるさと  
整備と保全

## 第9回全国棚田(千枚田)サミット・ニュース

岐阜県恵那市で開催される第9回全国棚田(千枚田)サミットのテーマが決定した。「棚田とともに生きるふるさと—整備と保全—」である。

これは、恵那市の棚田百選にも選ばれている棚田、坂折地区的棚田19haでの経験に基づいています。坂折地区は、平成6(1994)年から農地整備構想を検討し、平成9年に事業実施の方針を決定しながらも、整備と保全のはざまで揺れた地域である。市では、平成9年度から10年度にかけての歴史・民俗調査等も行つた。そして、平成11(1999)年には、早稲田大学教授・中島峰広氏を中心に地元農家も入つた「恵那市坂折地区的棚田に関する整備・保全構想検討」が決まりました。

こうした事例を全国に紹介し、「棚田と生きる」一つのスタイルを広く提案するサミットとなりそうだ。事例発表には、地元の農業高校生や小学校の調査研究、体験などの発表も予定されており、地元に根ざした棚田のあり方も見せてくれる。

「棚田と生きる」が組織され、1年をかけ、棚田の整備・保全、そして利活用が検討された。

## 会員 募集中

棚田の保全・中山間地域活性化のための全国組織  
**全国棚田(千枚田)連絡協議会**  
お申し込み・お問い合わせは協議会事務局  
石川県輪島市役所漆器観光課内

〒928-8525 石川県輪島市二ツ屋町2-29  
TEL:0768-23-1146 FAX:0768-23-1855  
協議会HP: <http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>

## 編集後記

先日、東京・阿佐ヶ谷のお米屋さんを訪ね、(今回原稿を寄せてくださいました中島哲さん)と話をしていたら、都市住民が棚田保全のためにできることの一(最低限であり、かつ最も重要な)は、「棚田ができるお米を食べることだよね」と意見が一致し、長い時間話し込んでしまいました。個人的には、継続して、棚田のお米を購入し、(値切ることなく)広く知ってもらうことが大事と思っています。

そのためにも、棚田地域の農家の方々に、さらに良い米をつくる意欲をもってもらうにはどうすべきかなど、いろいろ課題はあります。わたくしの場合、すぐフリーズする頭より、まだ軽やかな足を使って、みなさんの声を聴きながら、考えていくのも、悪くないと思っています。それぞれの立場を生かした、それぞれの「棚田ライフルスタイル」を見つけていたなら、とても素敵なネットワークができるよう感じています。

次号は、初夏のお届けとなります。お楽しみに。

石井里津子